

令和8年度 学校自己評価システムシート (さいたま市立大原中学校) 学校番号 209

【様式】

学校教育目標	Brand new Smile! ~「はつらつとした生徒」「地域の『一因』となる学校」~
目指す学校像	生徒が心も体も安心できる場を創る~「凡事徹底から凡事一流へ」、「希望の登校、笑顔の活動、満足の下校」~

重点目標	1 生徒一人ひとりの学力向上に資する「生成A1」等最先端の校内研修推進及び学校外の研修や視察からの授業改善 2 全職員のサポートのもと、全ての生徒が自分らしく学校で過ごすことが出来る教育環境の整備 3 「地域とともにある学校」であるために、生徒から地域に働きかけ「一因」として共に活動する取組の推進 4 生徒教職員の well-being のために、特に健康と安全を最優先とした教育環境の整備、最大限の予算執行 5 教職員それぞれの将来を見据えた研修の奨励と、生徒と向き合う時間を確保するための働き方改革の一層の推進
------	--

※重点目標は5つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

学校自己評価							学校運営協議会による評価	
年度目標							実施日令和9年2月9日	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1	(現状) ○全国学力・学習状況調査や市の学習状況調査では、どの教科も引き続き良好な結果である。 ○今年度から、生徒PC機材の更新により、iPad や google classroom が新たに導入された。 ○本校の教職員平均年齢(38.5歳)、教職経験平均年数(9.8年)いずれも比較的若く、教職経験10年未満の割合が過半数(56%)となっている。 (課題等) ○主体的・対話的で深い学びの視点による授業改善を図り、「未来創造」をコンセプトとし、生徒が自ら「0から1を創り出す」教育の具現化を図るため、教職員はファシリテーターとして生徒主体の授業へのサポートを行う立場となる新たな授業運営、そのための指導力向上が求められる。	・教育DXで実現させる学びの自律と個別最適な学び、探究的に、情報端末の活用を含んだ授業改善 ・「未来創造型授業」をコンセプトとした学習者を主体とした、生徒の興味・関心を引き出す探究的な授業実践	・新たに導入したiPadを活用した、「個別最適な学習」等効果的な授業運営や学習支援のあり方を検討し、さらなる学力向上に努めていく。 ・全国学力・学習状況調査実施後、生徒が自己採点を行い、早期に自ら状況と課題を把握出来るようにする。 ・教育委員会等と連携して、教職員の授業改善を図る機会を創出する。	・アンケートにおいてPCの活用率が前年度に比べ上がったと回答した生徒及び教員の割合が、いずれも前年度より高い80%以上を達成出来たか。 ・全国学力・学習状況調査の結果分析を教職員全体が組織として行い、教職員アンケートにおいて「今後の指導に役立った」など肯定的回答80%以上を達成したか。 ・年度末の学校評価(教職員)において、「生徒とともに探究的な学びを実践出来た」(「未来創造型授業」)など肯定的回答の割合が、引き続き85%以上になったか。 ・「未来創造型授業」について研修する機会を設定し、学校評価(生徒)で「目的をもって学校生活を送れる」のA評価の割合が前年度の割合(44.9%)を上回ったか。				
2	(現状) ○昨年度「未来創造プロジェクト」により、生徒が主体となった新制服の着用が1年生から開始された。 ○令和7年度学校評価(生徒)において、「目標をもって生活している」A評価44.9%、「あいさつをすることは重要だと感じている」A評価71.2%、「学校は悩みやトラブルに十分対応してくれる」A評価58.3%。 ○令和7年度学校評価(保護者)において、「学校は、生徒一人ひとりを大切に、尊重しながら教育活動に取り組んでいる。」A評価25.6%。 ○生徒指導や教育相談に関する対応について、各主任をリーダーとして全教職員が組織で対応することができている。(課題) ○自信あふれるあいさつをする生徒がさらに増えるといい。 ○学校生活や進路(特に高校進学後)の具体的な目標をもつ生徒が少ない。 ○配慮を要する生徒及び課題をもつ生徒への適切な支援(個別対応や相談体制)と、個を認め合う環境の一層の醸成が必要である。	・エージェンシーを発揮し、地域の「一因」となり、自らの夢に向かって活躍する生徒の育成 ・積極的で、きめ細かな生徒指導の推進・教育相談の充実	・教職員自身が元氣なあいさつを励行し、生徒たちへあいさつを継続的に、その重要性を伝える。 ・スクールカウンセラーの活用など、生徒の個性を尊重し、個に応じた指導と支援、課題をもつ生徒への最適な支援を、適切なタイミングで継続して実施する。 ・積極的な生徒指導体制と誰一人取り残さない教育相談体制やSolaるーむ及びさわかやか相談室、学校外の関係諸機関との連携を一層充実させる。	・学校評価で生徒の「目標をもって生活している」A評価が50%以上になったか。 ・学校評価で保護者の「学校は生徒一人ひとりを大切に、尊重しながら教育活動に取り組んでいる」A評価の割合(25.6%)を上回ったか。				
3	(現状) ○学校地域連携コーディネーターを中心に、地域住民等の参画を得て、チャレンジスクールが運営できている。 ○地域交流室が開室し、地域へのボランティア交流等の窓口として機能している。 ○地域の公民館や自治会等からの行事参加依頼に応え、多くの生徒が地域の行事に参加している。 (課題) ○保護者からの視点では、生徒が地域に関心を持ちたり生徒自身ができることを考えたりすることの意識がまだ低いと感じている。 ○保護者の学校評価「学校は、生徒たちの様子や必要な情報を保護者に適切に伝えている」におけるA評価が例年低く、保護者が求める情報を発信するための改善が必要である。	・学校運営協議会を軸にした地域と連携した教育活動の展開 ・開かれた学校づくりの推進	・生徒を地域の行事や活動にボランティアとして積極的に派遣し地域とのかかわりをより多く、強くする。 ・「フィールドワーク」や「未来くるワーク体験」、地域の人材を活用した「未来くる先生」を通して、地域の人と関わりを深くする。	・地域活動やボランティア活動等で、生徒が主体的に参加できる機会を設定し、昨年度以上の生徒(目標のめ180名)の参加があったか。 ・学校評価で、生徒の「学校は、様々な活動を通して、地域に輝く学校になりつつある」に関する項目、保護者の「学校は様々な活動を通して、地域に輝く学校になりつつある」におけるA評価が30%を上回ったか。				
4	(現状) ○昭和58年に建設された歴史ある現校舎であるが、在校生も含めた歴代の生徒の清掃等により、落ち着いた学習に取り組むことが出来る環境となっている。生徒の安全に対する意識も高く、事故発生を未然に防いでいる。 (課題等) ○校舎の老朽化が目立つこともあり、毎月の安全点検を確実に実施、管理職が確認し、生徒と教職員の安全を脅かす緊急性の高い案件について早急に対策を行う必要がある。 ○少しでも現状より良い学習環境となるよう、教職員だけでなく、生徒からのアイデアを活かし、生徒自身も環境整美に参画するシステム構築が必要である。	・生徒とともに教育環境を改善する取組の推進 ・限られた予算を最大限に活用した予算執行	・生徒主体の「未来創造プロジェクト」に加えて、既存の専門委員会の活動の活性化による、生徒発信の教育環境の改善に取り組む。 ・生徒の意見を反映した教育施設面での改善に少しずつでも取り組む。	・生徒教職員にとって、健康で安心・安全な教育環境が整備されたか。 ・外部講師を招聘した研修を実施し、研修内容への肯定的評価が90%以上になったか。				
5	(現状) ○教科指導、部活動指導等で実績のある教職員が複数在籍している。また、授業でも生徒指導でも「一人ではなく常に組織で」という考えが定着している。 (課題) ○「基本は授業」を合言葉に、全教職員で取り組む学校課題研究等での新たな学び合いと教職員の資質・組織力向上を推進する。 ○今後の教職員人生を見据え、現状に満足せず、さらに上のステージを意識させ活躍してほしいと期待している。 ○先生のやりがいと子どもに向き合う時間を確保を両立するための教職員の負担軽減の推進がさらに必要である。	・適切な指導力と生徒・保護者との信頼関係を基盤とした教育活動に、協働で取り組むことの出来る教職員の育成及び資質向上	・教科指導力をさらに高めるため、校内相互授業参観に加えて、市立中学校に留まらず、小学校や高等・中等教育学校を訪問しての授業参観等を提供する。 ・職員間の風通しと良くして、情報共有と共通理解を徹底し、指導に当たる。特に、若手がベテランと一緒に活動する機会を意図的に設け、若手の技能向上とベテランの技能継承を図る。 ・在校時間システム集計結果を基にしながら、管理職が定期的に教職員の業務量を確認し、教職員自身のwell-beingを推進するための支援をする。	・相互授業参観の回数、本校以外での授業視察を教職員が実施することで、自らの今後の指導改善につなげることができたか。 ・学校評価(教職員)「授業研究や評価に関する研究を高めることができた」の項目でA評価が昨年度を上回ったか。 ・学校評価(教職員)「業務改善」の項目で、A評価が昨年度を上回ったか。 ・全教職員が、計画的に年間10日以上休取出来たか。				

学びの質の向上に関する取組

心の子どもの発達やサポートに関する取組

地域とともにある学校づくりに関する取組

教育環境の整備に関する取組

教職員のキャリア形成に関する取組

令和7年度 学校自己評価システムシート (さいたま市立大原中学校)

学校番号 209

【様式】

学校教育目標	Brand new Smile! キーワードは「笑利!」と「求利!」=はつらつとした生徒、地域に輝く学校=
目指す学校像	・希望の登校 ・笑顔の活動 ・満足の下校

重点目標	未来の創り手として、笑顔で人と関わり、探究的な視野で将来を捉え、地域を支える一因として、主体的に貢献していこうとする心の育成
------	--

※重点目標は5つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

学校自己評価							学校運営協議会による評価	
年度目標							実施日令和8年2月17日	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1	(現状) ○全国学力・学習状況調査や市の学習状況調査では、どの教科も良好な結果である。 (課題等) ○主体的・対話的で深い学びの視点による授業改善を図り、「未来創造」をコンセプトとし、生徒が自ら「0から1を創り出す」教育の具現化を図るとともに、教職員も教師主導型の授業から生徒主体の授業への意識改革を促していく。	・教育DXで実現させる学びの自律と個別最適な学び、探究的に、情報端末の活用を含んだ授業改善 ・「未来創造型授業」をコンセプトとした学習者を主体とした探究的な授業実践をとおして、生徒の興味関心を引き出していく。	・ICTを活用した学習支援のあり方を検討し、さらなる学力向上につとめていく。 ・全国学力・学習状況調査について、生徒が自己採点を行い、早期に生徒自らが学習状況を把握できるようにする。	・アンケートにおいてPCの活用率が前年度に比べ上がったと回答した生徒、教員の割合が85%以上を達成することができたか。 ・全国学力・学習状況調査の結果分析を教職員全体が組織として行い、教職員アンケートにおいて「今後の指導に役立った」など肯定的な回答が90%以上を達成したか。	・学校評価(教職員)で、「未来創造型の授業の基礎となる、自ら進んで意欲的に学習する生徒を育てられた」と回答した割合は100%となった。昨年度が73%であったことから、飛躍的な上昇を遂げることができた。 ・「未来創造型授業」について研修する機会を設定し、学校評価(生徒)で「目的をもって学校生活を送れる」のA評価の割合が前年度の割合(40.0%)を上回るようにする。	B	・ICT機器を活用した学習支援の在り方についてさらに実施・検討していくことや全国学力学習状況調査の分析を、普段の学習でどのように生かしていくか、各教科等での検討をより一層行っていく。 ・市教委指導主事等のエキスパートを今後も招聘し、様々な角度からの分析と生徒へのアプローチを考え、実践していく。	・タブレットを活用できる生徒が多いことは、主体的な学習をはぐむ上で重要な一因になっている。さらなる推進を期待したい。 ・授業におけるタブレットの効果的な活用方法について、引き続き、高い活用率を維持するとともに、さらなる活用方法の研究を進めていってほしい。
2	(現状) ○昨年度よりスタートした「未来創造プロジェクト」により、生徒が主体となった制服の変更及び校則の改訂ができた。 ○令和6年度学校評価: 生徒「目標をもって生活している」A評価40.0%、「あいさつをすることは重要だと感じている」A評価71.2% ○令和6年度学校評価: 生徒「学校は悩みやトラブルに十分対応してくれる」A評価47.2%、保護者「学校は、生徒一人ひとりを大切に、尊重しながら教育活動に取り組んでいる。」A評価23.1% ○生徒指導や教育相談に関する対応について、組織で対応することができている。 (課題) ○進路に対して高校進学後の具体的な目標がもてない。 ○配慮を要する生徒個々への対応と関を認め合う環境の情勢。 ○個に応じた支援や相談体制のより一層の確立。	・エージェンシーを発揮し、夢に向かって活躍する生徒の育成 ・積極的に、きめ細かな生徒指導の推進・教育相談の充実	・社会生活に必要なコミュニケーション能力、基本的な生活習慣を培っていく。 ・将来の社会的・職業的な自立に向けた必要な基盤となる能力や態度を、領域のみならず、教科横断的計画し、キャリア教育を進めていく。	・学校評価で生徒の「目標をもって生活している」A評価が50%以上になったか。 ・学校評価で保護者の「学校は生徒一人ひとりを大切に、尊重しながら教育活動に取り組んでいる」A評価の割合(23.9%)を上回ったか。	・生徒の主体的な活動を促し、それを肯定的に評価する機会を意図的に設定した結果、生徒からの「目標をもって生活している」A評価は44.9%で、目標値の50%には届かなかったが、昨年度の数値(40.0%)は大きく上回ることができた。 ・ホームページ等を通じ、学校の様子を保護者に広く伝え続けた結果、保護者からの「学校は生徒一人ひとりを大切に、尊重しながら教育活動に取り組んでいる」A評価は25.6%となり、昨年度を上回ることができた。 ・生徒指導、教育相談体制の見直しを図り、「誰一人取り残さない」ため、生徒一人ひとりに寄り添うと同時に組織での対応を心がけ、報告・連絡・相談・見届けの体制を強化した。結果として、生徒からの「学校は悩みやトラブルに対応してくれる」A評価は58.3%に上り、昨年度の41.1%を大きく上回った。一方で保護者からの同じ質問A評価は17.2%で、昨年度の20.8%から減減となった。	A	・未来創造プロジェクトの活動を今まで以上に活性化させていくと同時に、一部の生徒だけでなく、全校生徒がこのプロジェクトに参加できるようにシステムを構築する必要がある。更に地域にもこの活動について周知を深めることにより、地域のニーズも捉えた活動に昇華させていく。 ・学校の様子を伝えるだけでなく、保護者や地域のニーズを学校に伝えていただくことで、多くの目で生徒たちを見守れる環境を醸成する。 ・今後も定期的に教育相談部会を開催する。 ・「鋭敏な感覚、的確な判断、迅速な行動」をより一層全教職員に意識させて、組織的な教育相談体制の構築に邁進していく。 ・来年度は、「未来創造」型の学校教育の中で、「Well-being」を意識した学校生活の推進」をどの教育活動でも実践できるように管理職が全教職員に指導助言支援を行っていく。	・大原中学校のよさとして、管理職を含めた先生方と生徒の距離が近い意味で近く、相互の信頼関係の高さがうかがえる。 ・大原中学校の生徒は明るく素晴らしい。引き続き、生徒たちのもっているポテンシャルを高めてほしい。 ・生徒同士、仲がよく、さらに男女分け隔てがないことに好感がもてる。 ・校長室を開放するなど、生徒がいつでも相談できる組織体制ができているのがよい。
3	(現状) ○学校地域連携コーディネーターを中心に、地域住民等の参画を得て、チャレンジスクールが運営できている。 ○地域交流室が開室し、地域へのボランティア交流等の窓口として機能している。 (課題) ○保護者からの視点では、生徒が地域に関心を持ちたり生徒自身が「できることを考えたりすることの意識が低いと感じている。(学校評価: A評価20.8%) ○保護者の学校評価「学校は、生徒たちの様子や必要な情報を保護者に適切に伝えていく」におけるA評価が24.7%であり、必要な情報が適切に入っていないと思われる	・学校運営協議会を軸にした地域と連携した教育活動の展開 ・開かれた学校づくりの推進	・生徒を地域の行事や活動にボランティアとして積極的に派遣し地域とのかかわりをより多く、強くする。 ・「フィールドワーク」や「未来くるワーク体験」、地域の人材を活用した「未来くる先生」を通して、地域の人と関わりを深くする。	・地域活動やボランティア活動等で、生徒が主体的に参加できる機会を設定し、昨年度以上の生徒の参加を促す(R6、のべ21名参加)。 ・学校評価で生徒の「学校は、様々な活動を通じて、地域に輝く学校になりつつある」に関する項目、保護者の「学校は様々な活動を通じて、地域に親しまれる学校になりつつある」におけるA評価が50%を上回ったか。	・未来創造プロジェクトにおける地域交流委員会が積極的に活動し、R7年度は、R6年度の21名を大幅に上回るのべ146名の生徒がボランティア活動に参加した。 ・「地域の一人」としてだけでなく、「地域の『一因』」となるよう、生徒たちから積極的に地域に働きかける取組を行った結果、保護者の「学校は様々な活動を通じて、地域に親しまれる学校になりつつある」におけるA評価は23.7%にとどまっていたが、B評価を入れたと81.5%となり、昨年度の79.8%を上回った。	B	・生徒のニーズに合わせ今後も運営計画を検討し、充実したチャレンジスクール実施を行っていく。 ・未来創造プロジェクトにおける地域交流委員会の更なる活性化を図り、来年度以降は、生徒の発案による「地域の『一因』」となる発信を行っていく。 ・充実した学校運営協議会になるように、今後も熟練の内容や議題を委員の皆さんと考え実施していく。	・ボランティア活動に参加した延べ生徒数が、昨年度よりも大幅に増えたことは評価できる。 ・来校機会を増やすことで、保護者への負担感が増えるという意見がある一方、授業参観がもう少しあってもよいかと思う。 ・地域との交流行事がふえることによる先生の負担が心配である。 ・大原中学校と公民館との連携により、部活動の活性化を図れるとよい。 ・地域行事への参加機会を増やしたことで、参加する生徒数が増えたのは、地域とのつながりを深める意味でも意義がある。 ・保護者会や授業風景など動画で撮影し、参加できない保護者に共有するなどの工夫をしてもよい。
4	(現状) ○教育DX推進本部と学習部が中心になり、情報端末をはじめとしたICT活用方法について、研修を進めている。 (課題等) ○教職員用PCを含むICTの活用について、より一層の教職員研修が求められる。校内研修を計画的に位置づけ、ICT活用の研修を進めていく。 (課題等) ○教職員用PCを含むICTの活用による、生徒主体の授業への改善が更に求められる。校内研修を計画的に位置づけ、ICT活用の研修を進めていく。	・授業力向上を図るための学び合い、高め合いを実施する ・授業力向上を図るための学び合い、高め合いを実施する	・教員一人ひとりが年間を通して取り組む授業力向上のテーマを設定し、授業を公開する。 ・各自の授業力向上の取組に関する資料を他の職員に広報する。 ・ICT活用の研修を行う。	・全教員が、年間を通して取り組む授業力向上のテーマを設定することができたか ・全教員が、授業を公開することができたか ・ICTの活用について研修を複数行うことができたか。 ・学校評価(教職員)「授業研究や評価に関する研究を高めることができた」の項目でA評価が昨年度(35%)を上回ったか。 ・全教員が、年間を通して取り組む授業力向上のテーマを設定することができたか ・全教員が、授業を公開することができたか	・年間をとおして「主体的に未来を創造する力」の育成を目指し、各教科における「創造力(0から1を生み出す力)」とはどのように育むべきか、年間指導計画に位置付けを行い、計画的に取り組むことができた。 ・早稲田大学中博之教授を講師に招き、「主体的対話的で深い学び」における評価の在り方についての研修会を開催し、肯定的な評価が94%に上った。 ・「創造力の育成」について、年間をとおしたテーマとして設定し、全教員が授業を公開、相互に意見を交換する中で、教科横断的な学習も自主的に行われるようになった。 ・美術科と国語科、美術科と家庭科のコラボ授業が行われた他、国語科、体育科、家庭科が学校給食とコラボし、敵立を考えるとといった取組が行われた。	A	・今年度の研究主題「『主体的に未来を創造する力』を育む教科指導の在り方」の成果と課題を今後も引き続き、教職員一人ひとりの授業力向上に取り組むとともに、学習者主体の授業改善と教科等横断的な視点を意識し、授業の充実につなげていく。 ・ICT活用の研修を今後も取り入れ、授業での積極的な活用をすすめていく。 ・今年度の実践をとおして、教科横断的な学習のモデルを教職員の間で周知させることができた。来年度はこの流れをさらに活性化させ、今まで以上の教科間の交流を図ることにより、生徒が主体的に考え、学びを深めていけるようにする。	・ICTの活用による研究や研修が進んでいってよい。 ・学校の業務改善を通じて、多くの職員が年休を10日以上とれている働き方ができていることはよい。 ・教育機関は、子どもにとってのきっかけ作りが大切である。引き続き、学校として新たな取組を模索していってほしい。
5	(現状) ○教職員学校の平均年齢(37.93歳)、キャリア平均(9.6年)とどちらも比較的若く、今年度初担任が4名いる。 ○教科指導、部活動指導等で実績のある教職員が複数在籍している。 (課題) ○全教職員で取り組む学校課題研究等での新たな学び合いと教職員の資質・組織力の向上。 ○キャリア年数の少ない教員への指導法の継承。 ○働き方改革をさらに推進し、教職員の負担感の減少。	・指導力を持ち、信頼関係を基盤にした教育活動に取り組む教職員の資質向上	・若手教職員を積極的に外の研修会に派遣し、他校、他自治体の実践を学ばせる。 ・若手とベテランを結ませる機会を多く設け、スキルの継承を図る。 ・在校時間システムの集計結果を基に月ごとの仕事量を振り返り、計画的かつ健康的に仕事に取り組む。	・講師を招聘した研修を実施することで、今後の指導に生かすことができたか。	・生徒用タブレットの更新に伴い、ICT支援員による授業づくり研修を複数回開催し、多くの教員が参加することができた。 ・学校評価(教職員)「授業研究や評価に関する研究を高めることができた」の項目でA評価が48%に上り、昨年度の35%を大きく上回った。また、「研修のテーマに対して教科で協力して取り組めた」の項目でもA評価は41.1%に上り、昨年度の32%を大きく上回った。 ・業務改善については、具体的な調査を行えなかったが、ほぼ全ての教職員が年休を10日以上取得できた。	A	・積極的に教科間でコラボが行われたり、授業参観が行われたり、授業づくり研修会が行われたりするのは、日頃から本校職員間の風通しがよく、それぞれの授業や生徒指導について相談できている風土があるからこそ考える。今後も職員一人ひとりが適材適所で活躍の場を得、それぞれの能力をお互いが補完できる環境を整備することが、結果的にお互いの負担を軽減し、業務改善につながると思われる。	・ICTの活用による研究や研修が進んでいってよい。 ・学校の業務改善を通じて、多くの職員が年休を10日以上とれている働き方ができていることはよい。 ・教育機関は、子どもにとってのきっかけ作りが大切である。引き続き、学校として新たな取組を模索していってほしい。

学びの質の向上に関する取組

子どもの発達や心のサポートに関する取組

地域とともに関わる取組

教育環境の整備に関する取組

教職員のキャリア形成に関する取組